

# 学習効果を高めるアパレル製作授業の一例

——繊維学会夏季セミナーにおけるファッションショーを契機として——

村上 温子・田中 美貴・今井 裕子

## Using an Apparel Manufacturing Class to Upgrade the Learning Effect

——A fashion show during the summer seminar of the Society of Fiber Science and Technology is used as momentum in the learning process——

Atsuko MURAKAMI, Miki TANAKA and Yuuko IMAI

**Key words:** 製作意欲 Production motivation, 集団創造 Group creation, 授業展開 Class promotion

### I. 緒 言

第32回 繊維学会夏季セミナーが2001年9月5～7日に広島県尾道市で開催されるに当たり、同セミナー実行委員長 岡山大学工学部 島村薫先生、組織委員の京都工芸繊維大学 梶原莞爾先生、実行委員の文化女子大学 成瀬信子先生から広島・今治の素材を使ってファッションショーをしてもらえないかと直接の依頼をいただいた。

数ある学校の中からお選びいただけたことを光栄に思う一面、学外からの依頼によるファッションショーは初めてのことであり、権威ある繊維学会 夏季セミ

ナーにおけるアトラクション（9月5日）としての役割を果たせるか否かに大きな不安を抱いた。広島（デニム）・今治（パイル）の素材を使用するという点を踏まえながら、本学の学習課程の中で展開可能かどうかを学内で検討した。ファッションに関心を持っている学生達に身近な素材を使用させていただける・学外の立派な舞台に立たせていただけることはこの上ない恩恵であり、貴重な学習機会と考えお受けすることにした。図1に夏季セミナーパンフレットの表紙・挨拶・公開行事部分を示す。上記三先生のご援助により、素材をご提供いただき、製作者24名（学生21名・執筆者3名）により33点を製作した。



### ●開催のご案内

繊維学会は、高分子の概念が確立されて間もなく設立され、ほぼ60年経ち還暦を迎えます。この間、学問的にも技術的にも数々の発見・発明があり、社会を大きく変化させてきました。新世紀に入り、天然物に劣らない繊維・衣服の開発とともに、また20世紀の知識の積み上げの産物、社会構造・体系にも、より人間らしく快適に暮らせる生活環境が求められるようになりました。本セミナーでは、これまでの知識を再検討することにより、その真の価値を再認識し、あるいは反省した上で、21世紀へ繊維科学・技術を伝承することを目的としています。種々の観点から繊維産業を考えることを意図し企画されています。多くの方に参加いただき、活発な討論および相互の交流をととして、自己啓発の場として活用されんことを期待しています。

第32回繊維学会夏季セミナー 実行委員長 島村 薫

### 総合講演（公開講座、9/5(水) 13:00～17:30 しまなみ交流館）

繊維学会では市民に開かれた学会を目指すべく、科学と最先端技術、古いモンゴルの恐竜に関する総合講演3件と人間の感性にふれるファッションショーを開催します。市民の皆様の参加をお待ちしております（入場料無料）。

### Future Challenges for High Performance Fibers

米国空軍材料研究所 所長 Wade Adams

「知の世界」の拡大とアカデミアの役割

経済産業省 製造産業局次長 増田 優

モンゴル恐竜と人類

林原自然科学博物館 館長 石井健一

ファッションショー:

テーマ「Simple Modern Ethnic 一都会のハッピー・リラクゼーション」

総括: 広島文化短期大学 村上温子, 田中美貴, 今井裕子

図1 夏季セミナーパンフレット 表紙・挨拶・総合講演（公開講座）部分

## II. 方法および結果

### (1) 素材のご提供

繊維学会夏季セミナーご担当者である上記三先生と村上がご提供くださる二社を訪問して打ち合わせ、サンプルまたはサンプル添付パンフレットをいただいた。その後、学内でファッションショーを念頭に、サンプルから生地・風合い・色相・学生の技量等を考慮して後述する10種類の素材を依頼した。いただいた素材の概要は表1に示す。

### (2) 企画の経緯

広島文化短期大学生活文化学科ファッションコースでは、平成11年より年度末に卒業制作ファッションショーを実施している。平成12年度入学生・卒業生に関する授業は、1年生においては前期週1回（アパレル製作実習Ⅰ・スカート）、後期週1回（アパレル製作実習Ⅱ・シャツブラウス）である。2年生においては前期における週1回（アパレル製作演習・グループ

製作）と週1回（卒業制作）を含めて週に2回で、決して多いとはいえない。

卒業制作は個人単位で、その準備には1年かけることができるが、アパレル製作演習におけるグループ製作の作品は、半年間15回の授業で企画から縫製までを完成させなければならない。このため、限られた時間で最大限の効果を上げる授業展開が必要である。すなわち、テーマをあらかじめ設定し、素材も学校の方で何種類か提示し、あとは学生自身がデザイン展開していくという方式である。

今回依頼を受けたファッションショー作品は、準備期間が半年間ということと、素材提供があるという点で、本学でのグループ製作による作品製作の場合と条件が非常によく似ていた。具体的には、2年前期「アパレル製作演習」の課題作品として授業展開すれば、前期で完成させることができる。1セメスター15回の授業で、デザイン決定、パターンの製作、裁断、マーキング、縫製までを消化しなければならない。そのためにも第1回の授業までには素材の調達が終わってお

表1 提供していただいた素材の概要

カイハラ株式会社 ジーンズ素材の一貫生産（紡績・染色・織布・整理加工）及び販売				
社長 貝原良治				
本社 〒729-3107 広島県芦品郡新市町常1450 Tel 0847-57-8111 Fax 0847-57-8811				
工場 本社工場 上記				
吉舎・上下・高宮・君田・福山・羽須美 他 協力工場有				
①デニム2/1 ↗	11 oz	Indigo 100%	綿100%	40m
②デニム1/2 ↘	5.5 oz	Indigo 100%	綿100% 斑糸	5m
③デニム2/1 ↗	8 oz	Indigo 100%（やや濃色）	綿・ポリエステル・ポリウレタン・銀糸	20m
糸 空気精紡・リング精紡 7~30番手 70~150デニール 密度14~68本				
渡邊パイル織物株式会社 タオル製品及び織物の企画製造販売				
社長 渡邊利雄				
本社 〒794-0043 愛媛県今治市南宝来町2-8-1 Tel 0898-66-5108 Fax 0898-66-5035				
工場 愛媛県東予市河原津堂之元甲447 Tel 0898-22-1202				
①伸縮性パイル地（開発中）	生成無地	綿100%		20m
②大判バスタオル	特別先染め依頼 茜色	綿100%		5枚
③大判バスタオル	淡ブルー地 ピンク・茶・クリーム・グレルーブ状糸入	綿100%		5枚
④大判バスタオル	クリーム・黄土色・茶・緑青・青 中格子風	綿100%		5枚
⑤大判バスタオル	焦げ茶地	綿100%		5枚
⑥大判バスタオル	クリーム・朱赤リング状糸入り小格子風	綿100%		5枚
⑦大判バスタオル	紺地 焦げ茶・淡ブルー・クリーム 極小格子入	綿100%		5枚
⑧大判バスタオル	焦げ茶無地	綿100%		5枚
① 伸縮性パイル地は開発中について非公開であるが非常に細番手				
②~⑦ 大判バスタオル 糸 リング精紡 16~40番手 密度 30~52本				

り、デザイン画を描く段階に入らなければならない。もちろん学生の企画力や自主性を尊重し、それを育成することは重要である。

しかしながら、平成12年度入学生の2年生のカリキュラムでは、グループ製作における企画力養成の時間配分が欠落していた。今回は与えられた条件（素材提示）下で如何にデザイン展開し、作品へと仕上げていくか、そのプロセスを習得することを授業目標とした。この反省に関するカリキュラム修正は後述する。

以上の経緯から春季休業中に、素材およびテーマの決定を完全に教師サイドで行った。カイハラ株式会社のデニムのサンプルには、ブルージーンズに代表される青系統以外に多くのカラーバリエーションがあり、様々なデザイン展開が考えられた。渡邊パイル株式会社のパイルサンプルには、無地もの、キャラクターもの、幾何模様、花柄などがあり、数種に類別できた。

デニム地とパイル地とのカラーコーディネートを考え、違和感の無いグループを選択する過程で、インスピレーションを与えてくれる何点かが目に止まった。ブルー、茶、アイボリーを基調とした幾何柄もので、シャープさはないが、モダンな雰囲気があり、何かしら和テイストを漂わせている一群である。

この時点でデニムの色は青系統を選択して、風合いの異なる3種類の生地を依頼することにした。

パイル地は、本来の用途がタオルまたはバスタオルであるため、大きさに制約があり、厚みや布端の始末を考えると複雑なデザインは避けざるをえない。おそらくシンプルなデザインが素材感を最大に活かすであろうし、パイル地がもつリラックス感、織柄やカラーで若々しくアレンジできると考えた。これらの中からブルー系統のデニム地との相性がよく、しかもカラーバランスが取れている4種を選択した。あとは無地ものとして茶を補強し、差し色として赤系統色を加え、白系統は生成の伸縮性新素材を依頼することにした。赤系統色は落ち着いた「茜色」を希望したが、この色は渡邊パイル織物の定番商品に含まれていない色であった。そのため、糸の先染めの工程からからはじめて、織り上げていただく特別注文となり、大変贅沢な素材を依頼することになった。伸縮性新素材は開発中でありながら、その素材特性から注文が多く生産が追いつかない状況のところへお願いした。

3月下旬安芸灘地震が発生し、愛媛県伊予地方は大きな影響を受けられ、パイル素材が、実際に私たちの手元に届いたのは授業の3～6回目であった。素材を

見ることなしにデザイン画を描いたり、遅れの大きい素材を扱う学生は、パターン段階まで素材なしで製図にかかった。

ショーのテーマは、4種のパイル地を選出した時点で『Simple Modern Ethnic』に決めた。シンプルで、モダン、エスニックな印象のあるテキスタイルを使って、都会のプライベート・オケージョンで、力の抜けたリラックス感のある一着を、というのが当初のコンセプトであった。エスニックというのは、広く日本まで含むアジアをいい、副題を「— 都会のリラクゼーション—」として、何とか全体がまとまるものと考えた。デニム地は、学生が縫製に使用するミシンの機能から判断して11オンスをメインに選択した。縫製後にマシンウォッシュ加工を依頼し、作品に変化を与えることも考えられたが、作品が仕上がる日程との関連で難しかった。そこで、デニムを使用する作品の雰囲気を変えるためにビンテージ風とラメ入りを加えた。ラメ入りデニムは人気商品で、既に完売されていて、その時点では在庫はないとのことであったが、無理にお願いして見本用サンプルから譲っていただいた。

パイル地の色物はバスタオルとして織られているものである。生成無地は渡邊パイル株式会社と愛媛県繊維工業試験場とによって共同開発されている伸縮性パイル地（楊柳風）を選択した。この生地は現在開発中で糸使い等非公開あるが、非常に細番手の糸で織られ、織りあげた布を収縮加工することによって生じた細かな皺により、パイル地でありながらパイル地に見えない大変軽い新素材である。経方向の伸縮性が大きいいため形態安定性に劣る面もあるが、水に浸けると原状復帰する特性に、作品作りの染色・縫製・試着を通して気付いた。

### (3) 製作の経緯

4月中旬授業を開始した時、アパレル製作演習を履修した学生は21名であった。授業の概要に関連して、尾道市における繊維学会夏季セミナーのファッションショーの作品であり、出演することになる旨を説明した。短期大学の学生には「繊維学会」のイメージはつかみ難い様子であったが、素材提供があることは素直に喜んだ。また、尾道市におけるショーについては、旅行気分も味わえる感じで、気持ち良く受け止めてくれた。デニム地が広幅の重い巻で届いたり、パイル地の入った大きな箱が届くたびに製作への熱意は高まって行った。デザイン面では、素材が提示されたことに

よりイメージが纏めやすく、デザインの的を絞り易かったものと見受けられた。学生21名による作品では、ショーを構成するためには物足りなかった中で、田中・今井・村上も賛助作品を作ることにした。

学生たちのデザイン画を見ると「都会の」は良いとして、教師サイドから見るとリラクゼーション感が弱く、むしろ遊び着的要素の強いものであった。彼らにとってリラクゼーションとは、もっとプラスの気分、積極的に楽しむことから感じられる心身の解放された状態をいうのではないかと示唆された。リラクゼーションについて新たな発見、解釈を得てショーの副題を「—都会のハッピー・リラクゼーション—」に変更した。差し色として特別に先染めを依頼した赤系統のパイル地は、落ち着いた茜色をお願いしたが、このピンク系の色こそ彼らのリラクゼーションのスピリッツ、象徴であるように受け取った。

まだ技術が伴わない学生たちは四苦八苦して課題作品に取り組んだ。1年生の授業で縫ったことがあるのはスカートとシャツブラウスのみである。特にパイル地を選んだ者は、マーキングの困難さや、ほつれつれやすさ、厚み部分の縫いにくさに苦慮した。単純なデザインでも学生自身のオリジナルであり、そのままが本にパターンとともに載っているわけではない。卒業後はほとんどがファッションアドバイザー（販売員）を目指す学生たちであるが、パターンから考えて少しずつ製作を進めた。風合いの違うデニム地を組み合わせた学生、風合いの違うパイル地を組み合わせた学生、デニム地に対する洗濯回数を変え、自分で数段階の素材変化を付けた布地創りからはじめた学生、硬いデニム地と柔らかいパイル地を組み合わせた学生、硬いデニム地と伸縮性パイル地を組み合わせた学生など、さまざまな工夫や試行錯誤がなされた。未熟な点が多々あり、如何ともし難かったがファッションが大好きな学生たちの、19歳という若い感性をご覧いただくことにした<sup>1)</sup>。

#### (4) ファッションショーにおける発表

作品は夏期休暇に入る前に完成したが、リハーサルは本番前に引き寄せ、文化短大の講堂で前日の午前・午後に行った。作品は素材やデザインの関連性から7タイプに分け、それぞれにふさわしい選曲を行った。企画したステージ進行プランが円滑に進むよう、立ち位置、ウォーキングルートについてプリントを配布した。実際にはステージの大きさ、歩く速さ、曲へのは

まり具合などから、プランをベースにしながら新しいウォーキングルートを加えることになった。

当日は、10時30分からの現地会場におけるリハーサルに間に合うよう出発した。本番は16時の予定であったが、夏季セミナー公開講演の会場準備の都合で、舞台が使用出来る時間帯が制限され、午前中1時間弱のリハーサルであった。公開講演用の垂れ幕や機器などの設営が進められる慌ただしさの中でリハーサルを行った。学生達は、初めての会場・舞台にも関わらず、前日のリハーサル通りに整然とこなし、衣裳と照明の色合わせを担当される舞台技術者からもお誉めの言葉が出ていた。

午後からは、昼食をはさみヘア&メイクに取りかかった。衣裳を身につけているため外出が出来ず、待ち時間は長く感じられた。さらにプログラム進行の遅延から、予定時刻を過ぎても出番とならず、学生たちは立ち続けた状態（綿素材のため座わって生じた皺を消しにくい）で待機した。

本番は舞台設備の都合から、午前中のリハーサルとは異なる深い位置からの出となり、1曲目は曲が少し足りなくなった。しかし学生たちは整然としたウォーキングで舞台の下手に消え、鑑賞者には全く不自然には見えなかったようである。ステージの数場面を図2に示す。

ショー終了後、緊張感から解放された達成感・満足感が入り混じった学生たちの涼やかな笑顔は、自分たちが学んでいる分野で、一番興味がある身近な手段で自己実現を図り得た喜びを表していた。

上述するように、学生たちは、夏休み中にもかかわらず、前日全員参加でリハーサルを行い、当日も無遅刻・無欠席で団体行動をとり、舞台では臨機応変なウォーキングで責任を果たした。この時、私たちは学生たちが本当によく育って来ていると実感し、誇りに思った。大きな発表の場を前提にする授業展開であったことが製作意欲を高めかつ持続させたと判断できる。また、発表に対する期待感が舞台に立つ責任感に変わったものと思われた。作品製作から発表までの大きなエネルギーになった学習効果について考えさせられ、「個の創造」を基点に新たな「集団創造」への展開と捕らえ、カリキュラムを順次修正することにした。

### Ⅲ. 考 察

綿素材によるデニム・パイル地を使った作品を、若い学生の出演により発表したことが、素朴な初々しい

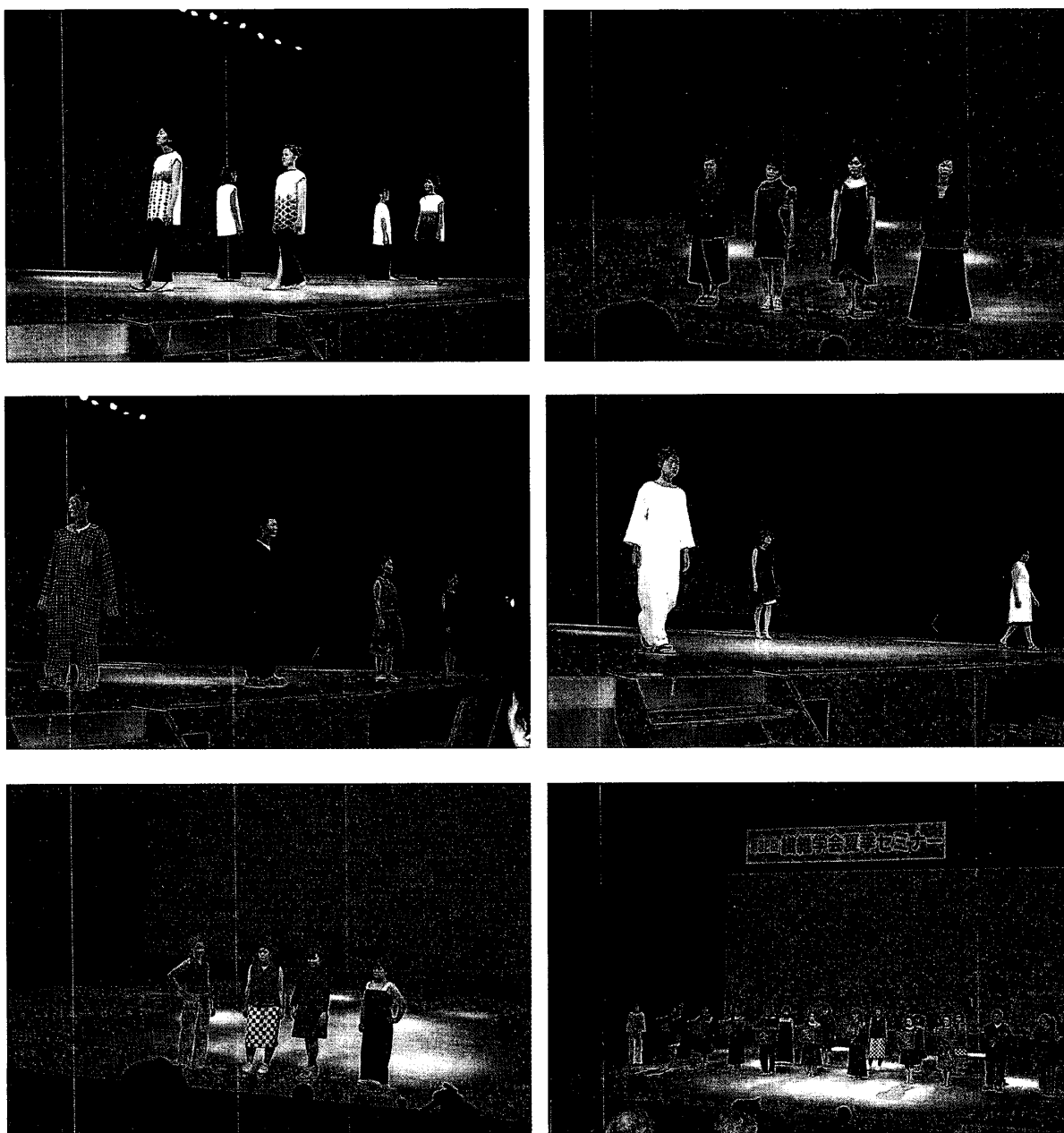


図2 ステージ風景

好印象を与えた由、出席された繊維学会の方々から伺った。

学生たちにとっては、日頃学んでいることに関連して、学外で評価していただいたことは大きな自信になったようである。一方、私達は今回のショーを通して、一つ一つの作品が新たな集団創造として結実していく教育効果を改めて認識した。

夏季セミナーで公開された総合講演及びファッションショー終了後、懇親会が開催された。その席上で、総合講演『「知の世界」の拡大とアカデミアの役割』を

講演された経済産業省 製造産業局次長 増田 優氏から「モノ作りに対する評価を高めるべきである。学生の作品発表に何らかの評価を与えられないか。」とのお言葉があったと後日お聞きした。このことについて、繊維学会で検討され、繊維学会誌（繊維と工業）<sup>1)</sup>の「夏季セミナー報告」に出演した学生の氏名を掲載してくださる栄に浴した。

近年、アパレル業界ではコスト競争に対応するため、生産工場の海外移転が進み、国内における生産の場は非常に少なくなり、モノ作りに対する評価も低い。し

たがって被服生産の場は減少し、若い世代は被服生産の現場を見る機会は少ない。したがって、ファッションに対する関心は大きい反面、製作に対する関心を持ち難い現状である。

しかしながら、インディーズブランドに見られるように、若い世代はクリエイションに対する潜在的なあこがれを持っている<sup>2)</sup>。今回、経済産業省 製造産業局の方から、製作した学生に対して評価をというお言葉があったことを真摯に受け止め、被服製作の授業に反映させたい。そこで、学習効果を高めるために一つの作品においてはトータルファッションを念頭に完成度を高め、さらにショー形式による集団創造を目標とする授業展開が可能なカリキュラムに修正することにした。具体的には選択科目として、平成13年度入学生からファッションクリエートⅠ・Ⅱ、プロモーション企画、メイクアップ演習を加え、平成14年度入学生には試験的にヘアスタイリング講習を行った。いずれも履修する学生が多く、生き生きと受講している。

現時点では、これらに対する成果を明確に示すことはできないが、平成14年度の卒業制作ファッションショーにおいて多少の成果を感じている。卒業制作ファッションショーは、従来学内で開催していたが、平成14年度は「広島市 まちづくり市民交流プラザ」で開催した。広島市の中心に位置する会場で、来場者が多かったことも励みになったと思われるが、学生達はショーに対して積極的・意欲的に取り組み、従来に比べ完成度の高いショーを創りあげたと感じている。学生の自己評価や来場者のショーに対する評価も、良好で確かな手応えを感じている。さらに学習効果を高める授業展開を試行したい。

#### IV. 要 約

繊維学会からの依頼を受け、第32回繊維学会夏季セミナー（於尾道市）において、広島県のデニム地・愛媛県のパイル地を使用したファッションショーを担当した（平成13年9月5日）。

1. 作品製作にあたり、平成12年度入学生のファッションコースカリキュラムにおいては、企画力を養成す時間配分をしていなかったため、教師側が使用素材を選択し併せてショーのテーマを『Simple Modern Ethnic —都会のリラクゼーション—』に決めた。
2. 実際の製作は「アパレル製作演習」の課題作品として、与えられた条件下即ち限定された素材でデザ

イン展開し、作品を仕上げるプロセスを修得することを目的として授業展開した。

3. 企画段階における学生のイメージは、教師側から見るとリラクゼーション感が弱く、遊び着的な要素が強いものであった。若い世代にとってリラクゼーションは、積極的に楽しむことから感じる心身の解放された状態をイメージしているという新たな解釈を得たため、ショーのサブタイトルを「一都会のハッピー・リラクゼーション」に変更した。
4. 学生たちは、夏季休業中のリハーサル、ショー当日の早朝移動等負担が大きかったにもかかわらず整然とこなした。大きな発表の場があったことが、製作意欲を高めかつ持続させた教育効果を実感した。
5. 本セミナー 総合講演講師 経済産業省製造産業局 増田優氏から「モノ作りに対する評価を高めるべき」とのお言葉があったと聞いた。
6. 上記4. の教育効果を、個による創造から集団創造として結実できるように、ファッションクリエート、プロモーション企画、メイクアップ演習をカリキュラムに加えた。

終わりに臨み、繊維学会夏季セミナーという栄えある大きな場におけるショーの機会をお与えくださった繊維学会、沢山の素材を快くご提供くださったカイハラ株式会社・渡邊パイル織物株式会社に改めて厚くお礼申し上げる。また、夏季休業中の事前リハーサル、ショー当日は早朝から移動・出演など負担が大きかったにも関わらず整然とこなした次の学生たちに深く感謝する。

ファッションショー出演学生：

青木裕子、池田ゆかり、上鹿庭由貴、奥本志津子、尾笹香代子、川上祐樹、北崎麻依子、九矢亜由美、坂本麻由、佐々木愛、清水美千子、武田直子、田中章宏、内藤麻由、平野弥生、松本智絵美、山崎優子、山田稚佳子、山田知子、吉崎富子、吉村理絵

#### V. 文 献

- 1) 平成13年度（第32回）繊維学会夏季セミナー講演要旨集、繊維学会、9-11（2001）
- 2) 繊維学会誌 Vol.57, 12, 18-19, 繊維学会（2001）
- 3) 田中美貴、今井裕子、村上温子：制作意欲を高める被服教材の提案、広島文化短期大学紀要、第32号、8-12（1999）

### Summary

At the request of the Society of Fiber Science and Technology, Japan during their 32nd summer seminar in Onomichi City, we organized the fashion show. The fashion show emphasized the use of denim fabrics made in Hiroshima Prefecture and pile fabrics made in Ehime prefecture. (September 5, 2001)

1. Since there was no time allowed for planning for the fashion show in the fashion course curriculum for enrollees in the year 2000, the teachers selected the materials to be used and decided on the theme 'Simple Modern Ethnic — Relaxation in City' for the fashion show.
2. As an assignment in apparel manufacturing, a lesson plan was developed in order to master the process from design to finish work under the agreed upon condition that the materials to be used are limited.
3. From the teachers' viewpoint, the image that the students cherished regarding the theme at the planning stage had a weak feeling in respect to relaxation, but had a powerful feeling relating to leisure wear. Since we had a new understanding that the younger generation sees relaxation as a situation in which body and mind are relaxed by actively enjoying something, we changed the subtitle of the show to 'Happy relaxation in City.'
4. Even though the rehearsals on summer holidays and the early morning activity on the day of the show were a difficult workload for them, the students fulfilled their roles in an orderly manor. We realized that the educational effect that this chance for presentation of their work would have to help heighten their desire to continue on in manufacturing.
5. Mr. Yuzuru Masuda, a guest speaker at this seminar from the Production and Industry Bureau of the Ministry of Economy, Trade and Industry, suggested that manufacturing should get a higher evaluation.
6. In order to develop the educational effect pointed out in number 4 above from individual creativity into team creativity, we added fashion creation, promotion planning and make-up drills to the curriculum.